2020 東京オリンピック・パラリンピックから憶うこと

学校長　渡辺　雅之[1,2]
[1] 東京学芸大学　芸術・スポーツ科学系健康・スポーツ科学講座健康科学分野
[2] 東京学芸大学附属竹早中学校

要　約

２０２０年のオリンピック・パラリンピック開催地が東京に決まった。最終的に他の候補地であるマドリードとイスタンブールではなく，東京に決まったことの要因分析などではなく，東京で行うことの意味を考えると，これまでの日本のオリンピック・パラリンピックの歴史をふまえ，東京で開催することがいいことなのだろうか改めて考えてみた。

あの日[1)]，ロゲ IOC 会長が「TOKYO」とカードを見せた時に身体に走った「ざらつき感」は一体何だったのだろうか。その正体を解明してみたい。

I 序

平成 26 年 9 月 20 日から 12 月 7 日まで杉並区立郷土博物館分館において「1964 東京オリンピックと杉並」展があった。入場無料の展示でボランティアの解説者が丁寧に当時のことを説明されていた。展示資料は，すべて区民が保管しているもので，提供要請に応えたものであった。バッジ，入場券（競技場だけでなく選手村食堂なども），選手団公式ウェア，聖火リレートーチホルダー，通訳報酬の記録（給与明細等），等々東京オリンピックに関わる私物の記念品の多くを見るとその影響の大きさを 50 年たっても垣間見ることができた。その一方で，東京都江戸東京博物館での展示「東京オリンピック・パラリンピック開催 50 年記念特別展東京オリンピックと新幹線」（9 月 30 日～11 月 16 日，観覧料は 1,340 円であった。）では亀倉雄策の作った数々のポスターをはじめ，いわゆる公的なものを見ることができて，コピーではない迫力が懐かしさを上回って蘇ってきた。また，パラリンピック・国際身体障害者スポーツ大会の展示もあった。東京オリンピックをカラーテレビで見られたことはよく記憶しているものの，パラリンピックについては全く記憶がない。敗戦によって荒廃した国土が短期間によくぞここまで復興したと世界中が感嘆したことを後で知ることになる。市川昆監督による映像「東京オリンピック」ならびにこの映画にまつわる「記録か芸術か論争」等を通じ，肌感覚としての東京オリンピックの体験は当時を知らぬ者には分かり難いのかもしれないが，日本国中すべてが東京オリンピックに向けたムーブメントであったのは確かである。「東京オリンピックと新幹線」の公式カタログ兼書籍[2)]の表紙には，「1964 年は，新しいニッポンのはじまりでした。」とある。また，Sports Graphic Number 誌 85[3)]の特集「伝説・東京オリンピック」の表紙には，「'64 年 10 月 10 日，東京は夢を見た」としている。小学校のオリンピック学習読本[4)]の標題は「みんなをむすぶオリンピック～夢・感動・未来～」である。野地の「TOKYO オリンピック物語」[5)]では，亀倉雄策らのデザイン，竹下亨らのコンピュータ化，村上信夫料理長による選手村食堂，飯田亮の警備会社（現在のセコム），市川昆の映画「東京オリンピック」，勝美勝らのピクトグラム（絵文字の世界初の標準化事業となった），

高峰秀子による河野一郎と市川昆の会談設定（市川昆の「東京オリンピック」に噛みついた担当大臣が河野一郎である）等スポーツヒーローではない大会の裏方のインタビューから「東京オリンピック」を描き出した。古書市で入手した東龍太郎[6]の「オリンピック」は1962年5月刊行である。当時東京都知事でIOC委員であり，オリンピック東京大会組織委員会委員である東の本には35人ものオリンピック関係者が寄稿している。東京オリンピックはパラリンピックとセットだった感を与える近年の演出ぶりと正反対のような，2年後には開かれる東京オリンピックの本としてはまったくパラリンピックにかすりもしない記述ぶりについては，本の表題が「オリンピック」なのだからとはいえ，多くの当事者達の意識には残念ながらパラリンピックはあくまで別物であり，添え物にすぎない感はぬぐい難い。

石井正己が2014年1月に編集した「1964年の東京オリンピック『世紀の祭典』はいかに書かれ，語られたか」[7]の中に渡辺華子の一文がある。「パラリンピック」と題したそれは読売新聞に掲載されたものである（1961年7月8日）。1960年のローマで開かれた「国際下半身不随者オリンピック」を視察した唯一の日本人として，イタリアでは現在のようなバリアフリーがすでに確立され，「ふだんからの身障者に対する自然な気持ちのあらわれが，ローマで一般オリンピックを主催するなら，パラリンピックの方もやろうじゃないかという身障者スポーツの支持者たちのかけ声に立ち上がる機運を盛り上げたのだと。」と記している。「明るく朗らかな運動会　パラリンピック観戦記」を記した中野好夫はオリンピックの対比として「会場の空気も，すべてが秒読みに統制され，まるで人間が組織の中に圧殺されたようなギクシャクさはない。競技がはじまってからも，フィールドの中はむしろのんびりしたものであった。真剣に勝負は争いながらも，そこにはあくまで人間が動いていた。」と印象を記す（週刊朝日1964年11月20日号）。

II 過去

日本が最初にオリンピックに参加したのは1912年ストックホルム大会であった。陸上競技に三島弥彦と金栗四三の二人が参加した。団長は講道館柔道を興した嘉納治五郎であった。三島は短距離100mと200mに出場し，予選最下位で終えた。金栗は国内で世界最高記録を出していたことで期待が大きかったが，長旅と食事で体調を崩し，レース当日の暑さ，坂の多いコース，石畳に足袋が破れ，腹痛の末32km付近で倒れてしまった。途中棄権である。レース翌日の日記には以下のように記されている。

『大敗後の朝を迎ふ。終生の遺憾のことで心うずく。余の一生の最も重大なる記念すべき日なりしに。しかれども失敗は成功の基にして，また他日その恥をすすぐの時あるべく，雨降って地固まるの日を待つのみ。人笑わば笑へ。これ日本人の体力の不足を示し，技の未熟を示すものなり。この重圧を全うすることあたはざりしは，死してなお足らざれども，死は易く，生は難く，その恥をすすぐために粉骨砕身して，マラソンの技を磨き，もって皇国の威をあげむ』[8]結局，金栗はその後のオリンピックで揮わなかったもののストックホルムでの失敗を一つひとつ分析し，研究し続けた。その結果が大正5年（1917）の本「ランニング」[9]に詳述されている。定価80銭が高いのか否か不明だが9月5日初版で10月15日再版とあるから売れたのであろう。内容は今に通ずるものが少なくない。金栗のもっとも有名な功績の一つがいわゆる「箱根駅伝」の創設であろう。金栗が75歳の時（1976年）スウェーデンオリンピック委員会に招待されてスタジアムのゴールより少し前から走りゴールした。アナウンスは「記録，58年8カ月と6日・・・」となされたように粋な演出と言えよう。1964年の東京オリンピックがアジア地域での初開催とされているが，実は1940年に東京が開催することになっていた。この第12回オリンピックは日中戦争の激化によって1938年7月16日に返上され，幻の東京大会となった。続く第13回

大会（ロンドン）も戦争のため中止となった。1936年のベルリンでのIOC総会で1940年開催を勝ち得ようとしたのは，この年が皇紀2600年となるからであった。日本中で皇紀2600年を祝う行事が行われていた。その一つがオリンピックであった。1964年に東京オリンピックを招致するためになされた多くの努力の中の一つには，「オリンピック正史」にはおそらく載らないであろうフレッド・イサム・ワダ（和田勇）を挙げねばならない。この日系二世が舐めた辛酸な戦前の苦労そして戦争中の苦労，戦後は祖国日本のためになした数々のはかり知れない貢献を知ると無邪気なオリンピック賛歌には組みできないのである。幸いにも高杉良が「東京にオリンピックを呼んだ男」[10]を出してくれたおかげで触れることができる。思わぬところで出会したのが，小林信彦の「名人　志ん生，そして志ん朝」[11]である。志ん朝が亡くなった後のことだが，「志ん朝のいる空間」に思いを馳せたところで「その『空間』の外はどうだったろうか？東京オリンピックに向けて，おそるべき都市破壊がおこなわれていた。日本の中心である日本橋は高速道路のかげになった。オリンピックが壊したのは街だけではない。東京の人間の証拠である東京言葉が消滅しつつあった。」とある。オリンピックをやるためには，古き佳き佇まいを近代化せねばならないということか。近代化すると言うことが文明だとすれば，その代償とは何であろう。失ったものはもう二度と手にすることはできない。

III 現在

ルール・競技規則は絶えず変わる。表向きの理由を錦の御旗とするも実際には裏の理由，真の理由というものが存在する。東京オリンピック・パラリンピックでは採用される種目と廃止される種目，さらに廃止後に復活する種目など喧しいほどのロビー活動や裏工作が繰り広げられている。オリンピック種目かそうでないかは国際レベルの選手の士気に影響する。特に日本では。登録選手数や団体数，年間活動水準（合宿や国際試合，強化のための遠征や国際交流試合など），予算規模等々に大きな影響を及ぼす。だから，必死である。そうしたルール・競技規則を変えることを「改正」と称する。他の字がないようである。「改正」がいつも正しいとは限らない。背後にはナショナリズムが存在する。政治や経済がぴったりとスポーツには張り付いているのだ。インフラは新築か改築か。移動手段はどうか。選手村の運営はいかなるものか。ドーピング問題はスポーツの根本に関わる大切な問題である。放映権という怪物が跋扈する。

IV 未来

サスキア・サッセンの「21世紀の東京　五輪より貧困と環境に目を」[12]から学ぶなら，世界の主要な都市の第一の難題は，金融・経済危機，第二が気候変動問題であり，第三には不平等という危機であり，オリンピック開催の問題は小さな出来事に過ぎない。現代の主要な都市は環境問題に対応しなければならないとしている。オリンピック開催が都市の基本的な再建の機会となるならば，オリンピックは未だ開催していない地域こそ意味があるのかもしれない。

冒頭の「ざらつき感」の正体とは理想と現実のギャップが経済，グローバル化によってもはや歩み寄れない程後戻りできない自覚なのか。

V 参考文献

1)朝日新聞2013年9月9日夕刊
2)東京都江戸東京博物館　行吉正一　米山淳一（2014）：「東京オリンピック・パラリンピック開催50年記念特別展　東京オリンピックと新幹線」，青幻舎
3)Sports Graphic Number 85（1983），文藝春秋
4)特定非営利活動法人東京オリンピック・パラリンピック招致委員会（2008）：「みんなをむすぶオリンピック～夢・感動・未来～―オリン

ピック学習読本（小学校）」，東京都/財団法人日本オリンピック委員会/特定非営利活動法人東京オリンピック・パラリンピック招致委員会
5)野地秩嘉（2011）:「TOKYO オリンピック物語」，小学館
6)東龍太郎（1962）:「オリンピック」，わせだ書房
7)石井正己（2014）:「1964 年の東京オリンピック『世紀の祭典』はいかに書かれ，語られたか」，河出書房新社所収　渡辺華子：パラリンピック，中野好夫：明るく朗らかな運動会　パラリンピック観戦記
8)後藤正治（2003）:「マラソンランナー」，文春新書
9)明石和衛・金栗四三（1916）:「ランニング」，菊屋出版部
10)高杉　良（2013）:「東京にオリンピックを呼んだ男」，光文社
11)小林信彦（2003）:「名人　志ん生，そして志ん朝」，朝日選書
12)サスキア・サッセン：「21 世紀の東京　五輪より貧困と環境に目を」，朝日新聞 2009 年 10 月 29 日朝刊